

平安時代の神泉苑はいづこに

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 神泉苑は、平安時代の面影が現代まで残る数少ない史跡の一つです。平安京遷都時に、禁苑として造営された神泉苑ですが、約1200年の歴史の中で、様々な伝説が生まれました。神泉苑の池（法成親池）には龍が住んでいる、池にかかる法成橋は静御前と源義経の出会いの場だった、などです。さらに、神泉苑は祇園祭などにみられる御霊会が初めて持たれた場所でもあり、御池通の名前の由来でもあります。

それでは、今私たちが目している現代の神泉苑の姿は、いつ頃成立したものでしょうか？

2013年度に神泉苑の中島にある善女龍王社の修復整備事業にともない、神泉苑内で初めて発掘調査を行いました。現在の神泉苑はいつ造営されたのか、神泉苑の歴史を発掘調査の成果から見てみたいと思います。

神泉苑の歴史 神泉苑は平安宮の南東に位置し、中央に大規模な池をもった天皇が占有する禁苑として造営されました。平安京左京三条一坊九町から十六町の8町の広大な規模をもった神泉苑は、平安時代初期には天皇による行幸や詩宴の場として、その後は祈雨や御霊会の場として利用されました。

鎌倉時代以降は荒廃と再興を繰り返しますが、江戸時代初期に僧



図1 『都名所図会』 神泉苑 (国際日本文化研究センター所蔵)

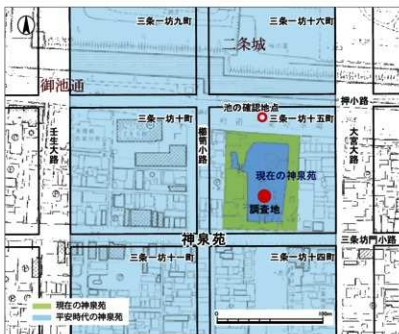


図2 神泉苑の位置と調査地

伏我が再興を発願し、京都所司代の板倉勝重や武將の片桐且元により神泉苑は整備されたことが分かっています。なお、二条城の築造や御池通の開通等により、現在では往時の16分の1ほどの面積にまで縮小しています(図2)。

江戸時代の神泉苑の姿は絵図に残されています。池の南東部に現在は存在しない多宝塔が描かれているなど、違いはあるものの、基本的な姿は現在の神泉苑とほとんど変わらないことが確認できます(図1)。

神泉苑の発掘調査 神泉苑の池、本殿のある中島、中島を護岸する石垣を対象に発掘調査を行ないました（写真1・2）。

池中の土の堆積は、上から現代の池底となる砂層、江戸時代から現代までの池の堆積土、礫層、基盤層でした。礫層からは18世紀後半の施軸陶器や染付が出土しました。この礫層は江戸時代後期には池底に敷かれていたとみられます。

また、池からは「寛政元年西七月修補之 知事辨空」と刻まれた銅製金具が出土しました（図3）。辨空は天明8年（1788）の天明の大火により神泉苑の堂塔社殿が焼失した後、神泉苑の院代となった人物です。寛政元年（1789）は天明の大火の翌年であり、この銅製金具は被災後の修復にともなうものと考えられます。

中島は盛土により形成され、周囲を石垣で護岸していました。中島の盛土からも18世紀後半の施軸陶器や染付が出土しました。

なお、今回の発掘調査では、平安時代の遺構や遺物は検出できませんでした。



図3 銅製金具と文字の拓影（左）



写真1 調査前の中島と池（南西から）



写真2 水を抜いた状態の調査中の池（北西から）

現在の神泉苑 これらの発掘調査の成果から、現在の神泉苑の池は江戸時代後期に造成または改修されており、中島もほぼ同時期に構築されたことが明らかとなりました。

神泉苑は江戸時代初期の再興後、天明の大火で建物が焼失したことが分かっています。江戸時代の絵図に描かれ、現存しない建物はおそらくこの大火により焼失したものと考えられます。ただし本殿のある中島については、大火後すぐに復興がはかられたようです。

おわりに このように、現在の神泉苑は、江戸時代初期の再興の際に原形がつくられ、天明の大火後の復興により現在の姿に近づい

たことが明らかとなりました。

また、今回の発掘調査では、平安時代の神泉苑の痕跡は確認できませんでしたが、現在の神泉苑北側では、平安時代の池の一部が確認されており（図2）、『リーフレット京都』No.73「神泉苑」で取り上げています。

一方で、江戸時代には池の「泥さらへ」（とろみさらへ）（波深）を行なっていることが史料から読み取れます。池底の泥と一緒に平安時代の遺物等もさらわれてしまった可能性もあります。荒廃と再興を繰り返した結果、江戸時代に現在の姿となった神泉苑ですが、これからも次の時代に残していきたいものです。

（松吉祐希）